

## 第二言語習得研究から見た効果的な英語学習について<sup>1)</sup>

### Effective English Language Learning from the Perspective of Second Language Acquisition Research

岩中貴裕

IWANAKA Takahiro

山口県立大学

*Yamaguchi Prefectural University*

#### Abstract

What are the characteristics of successful second language learners? What learning strategies do they actively use? SLA researchers agree that successful second language learners share the following five factors: (1) They are young, (2) Their L1 is similar to the TL, (3) They have high language aptitude, (4) They have high motivation to learn the TL, and (5) Their language learning method is effective. Of these five factors, only (4) and (5) can be improved by teachers' efforts. First, the age of the learner and the distance between the L1 and the TL cannot be changed by educational intervention. It is said that innate factors strongly influence language learning aptitude and that what teachers can do is limited. Teachers can only motivate students with motivational strategies and encourage them to employ effective learning methods that go with SLA research findings. The purpose of this paper is to provide basic information on teaching English. It will explain the following five factors: how to foster communicative competence, three types of memory, experiential and analytical learning beliefs, roles of AI in English education, and English language proficiency that English learners in Japan are expected to acquire.

#### 1. 第二言語学習に成功する学習者

第二言語学習に成功する学習者はどのような特徴を備えているのであろうか。またどのような学習方略を積極的に用いているのであろうか。白井（2023）は、以下の5点を第二言語学習に成功する学習者が持つ特徴として挙げている。

- (1) They are young.
- (2) Their L1 is similar to the target language (TL).
- (3) They have high language aptitude.
- (4) They have high motivation to learn the TL.
- (5) Their language learning method is effective.

ここで挙げられている5つの特徴の内、教員の努力と工夫によって改善することができるのは(4)と(5)だけである。まず学習者の年齢、母語と目標言語の距離については教育的な介入によって変えることは不可能である。言語学習適正は先天的な影響が強く、教員の働き掛けによって変えることは難しいとされている。我々教員が何とかできるのは動機づけを高めるように働き掛けることと効果的な学習方法を取り入れることだけである。

ここで参考のために母語と目標言語の距離が外国語学習に与える影響を理解しておきたい。図1はアメリカ人、つまり英語母語話者が外国語を習得するために必要とされる時間を示している。日常生活に必要とされる言語運用力

1) 本稿は2023年11月7日(火)に、下関市教育センター(下関市幡生新町1番1号)で開催された「令和5年度山口県高等学校教育研究会英語部会総会・研究大会」で行った講演内容を、加筆・修正したものである。

を習得するためにフランス語の場合は600時間、これに対して日本語の場合は2200時間が必要とされている。英語母語話者にとって日本語は言語差が大きく習得が困難な言語であるということが分かる。逆も同じである。日本語を母語とする我々にとって、英語は習得のために長い時間が必要とされる言語である。

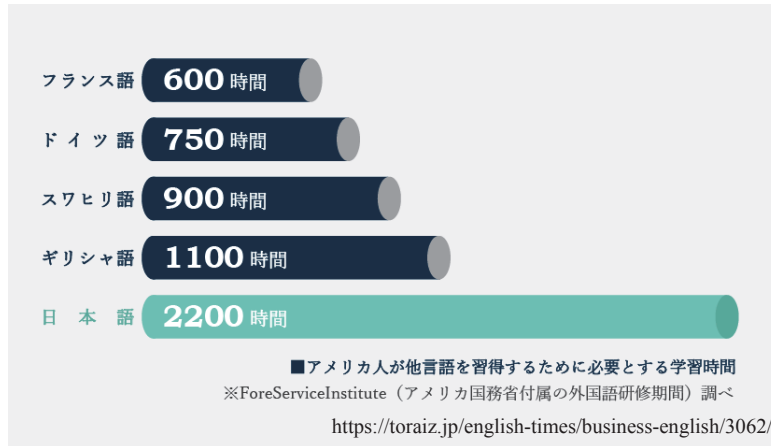


図1 英語母語話者が他言語を習得するために必要とされる学習時間

## 2. Communicative Competenceを育むために必要な3要素

外国語として英語を学習する際に、語彙・文法学習が重要であることは明らかである。しかしそれ以上に大切な要素として挙げられるのがインプット、アウトプット、そしてインタラクションである。

インプットというのは目標言語に触れることである。多読・多聴を行うことによってインプットの量を増やすことができる。教師が授業内で英語を使用すればそれもインプットになる。目標言語で聴くこと読むことはすべて学習者にとってのインプットになる。

次に必要なのはアウトプットである。スピーキングやライティングを行うことによってアウトプットの機会を確保することができる。

インタラクションは目標言語を意味のやり取りのために使用することである。授業内にコミュニケーション活動を取り入れることによって、インタラクションの機会を確保することができる。この3つの要素はいずれも大切であるが、まずはインプットの量をいかにして増やすかを我々英語教員は考えなくてはならない。インプットの量を増やすことは英語力向上のための必須事項である。

第二言語学習においてインプットは3つの役割を持っている。以下、廣森(2023)を参考にして考察を加える。まずインプットがないと言語習得は起らない。言葉を習得するためには言葉に触れることが不可欠である。赤ちゃんの母語は先天的に決まっているのではない。父親と母親の母語が日本語であっても、その子どもの母語が自動的に日本語になるのではない。両親の母語が日本語であっても、生まれた時から例えばドイツ語に触れていればその子どもの母語はドイツ語になる。生まれたばかりの子どもは、どの言語でも自然に習得できる状態で生まれてくる。

インプットの持つ2つ目の役割として「ギャップへの気づきを促す」ことが挙げられる。以下の例文の意味を考えてみよう。

- (1) Do you read me?
- (2) How can you read me so wrong?

多くの学習者は「read = 読む」と理解しており、典型的なコロケーションとして「read a book」や「read a newspaper」を思い浮かべるのではないだろうか。ここでは「人の気持ちなどを理解する」という意味で用いられている。インプットに触れることによって、自分が既に知っていると思っていた語が自分の知らなかった使われ方をされていることに気づく。これが「ギャップへの気づき」である。

インプットの持つもうひとつの役割として「頭の中に英語の回路を作る」ことが挙げられる。予測文法 (expectancy grammar) の獲得を促すと言換えることができる。母語では予測文法を活用してコミュニケーション活動を行っているのでリアルタイムでのやりとりが可能になる。例えば次の例文の括弧の中にどのような表現が入るだろうか。

(3) 天気良かったので公園で子どもと ( )。

「遊びました」、「サッカーをしました」、「キャッチボールをしました」という表現が頭に浮かんでくると思われる。このような判断をする際に使われているのが予測文法であり、これは大量のインプットに触れることによって習得が促進される。前置詞の使い方、冠詞の使い方などは文法的なルールを理解することも大切であるが、大量のインプットに触れることによって感覚的に身につけることが可能になる。

では文法学習と語彙学習はどのような役割を持っているのであろうか。まず、語彙力・文法力のある学習者は英語を効率的に学ぶことができる。同じ時間、多読や多聴を行った場合、より多くのことを中間言語体系に取り入れることができる。

図2は第二言語習得の認知プロセスを示している。前述のように第二言語習得のためにはインプットが必要である。第二言語習得の認知プロセスの第一段階が「気づき」である。例えば、「readという語は「(本などを)読む」という意味だけでなく「(人の気持ちなどを)理解する」という意味もあるんだ」というのが「気づき」の例として挙げられる。「気づき」、「理解」、「内在化」、「統合」というプロセスを経て最終的に習得した言語形式を用いてアウトプットができるようになる。つまり情報が長期記憶に保存された状態になる。

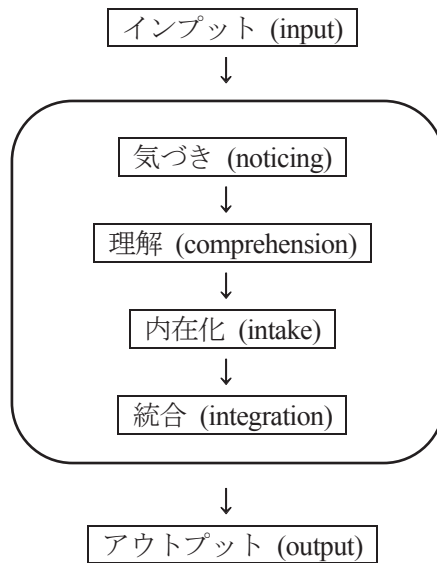


図2 第二言語習得の認知プロセス (Gass, 1997)

文法知識、語彙知識の多い学習者はこのプロセスが効率的に機能する。同じ時間、多読や多聴を行った場合、文法学習や語彙学習に時間をかけている学習者の方がより多くの情報を内在化することができる。

### 3. 3種類の記憶

我々の記憶は「エピソード記憶」、「意味記憶」そして「手続き記憶」の3種類に分けて考えることができる。「エピソード記憶」というのは自分が経験した出来事についての記憶のことである。これに対して「意味記憶」は特定の場所や時間に関係しない、つまり文脈に依存しない一般的な知識や情報についての記憶のことである。そして「手続き記憶」というのは、無意識・自動的に機能する記憶のことである。

「今朝、朝食に何を食べたか」、「週末に何をしたか」などについての記憶が「エピソード記憶」の例として挙げられる。経験した時の気持ちや感情なども一緒に記憶されているのが「エピソード記憶」の特徴である。

「意味記憶」の例として「1日は24時間である」「11月は30日までである」のような一般的な知識や情報についての記憶が挙げられる。文法や語彙についての知識は「意味記憶」として脳内に記憶されている。英語学習者が明示的な学習で学んだ英語についての知識は「意味記憶」として脳内に保持されている。

「手続き記憶」は、母語を話す時、自転車に乗る時、楽器を演奏する時、運動をする時などに使われている記憶のことである。意識しなくても機能する記憶と換言することができる。「手続き記憶」を用いて活動することによって高いパフォーマンスが可能になる。

英語を話せるようになるということは「手続き記憶」を獲得することを意味している。では「手続き記憶」はどのようにして獲得されるのだろうか。「手続き記憶」は同じような経験を繰り返すことによって獲得が促される(太田, 2021)。行動が記憶に反映されるのが「手続き記憶」の特徴である。非常に単純だが、英語を話すことができるようになりたいのであれば英語を話す練習をすればよいということになる。

文法形式は教えてすぐに使えるようになるわけではない。Skehan(2002)によると、学習した文法形式は以下の4つの段階を経て最終的に自由に使えるようになる。

- (1) Noticing : 言語形式への気づき
- (2) Patterning : パターンを理解 (例: 形容詞 -er + than)
- (3) Controlling : 正確さの向上
- (4) Lexicalizing : 語彙化 (長期記憶に保存)

学習者は学んだ言語形式をすぐに正確に使えるようになるのではない。第二言語を用いてコミュニケーション活動をする際は、誤りが避けられない。学習者が学んだ言語形式を用いてコミュニケーション活動を行う際、教員は誤りに対しては寛容な態度で接することが求められる。学習者がどのような誤りをしているかは把握するべきであるが、活動中の修正は避けるべきである。これについては次節で説明を行う。

#### 4. 体験的学習観と分析的学習観

記憶の手続き化を図るためには、似たような活動に何度も従事する必要がある。この時に考慮しないといけないのが言語学習観である。言語学習観は体験的学習観と分析的学習観に大別することができる。

「英語を学ぶ時はミスを気にせずにとんどん使ってみることが大切だ」、「英語は学んでから使うというよりは使いながら学ぶものだ」と思っている学習者は体験的学習観が高いと言える。一方、「英語を勉強することは文法規則を記憶することだ」、「英語の勉強とは英語を日本語に訳すことである」と思っている学習者は分析的学習観が高いと言える。

日本のように英語が外国語として用いられている国では、分析的な学習が重要であることは明らかである。分析的な学習を疎かにして英語力の向上は期待できない。しかし分析的な学習のみでは自信を持って英語を使うことができる学習者を育てることが困難であることが先行研究から明らかになっている。言語学習観と英語力または英語使用に対する自信の関係性を明らかにすることを試みた研究を3つ紹介したい。

Yang (1999) の調査参加者は台湾の大学生である。日本と同じように外国語として英語が学習されている。「テレビや映画を見る、あるいは実際に英語を使用することによって英語を学んでいる学習者の方が自分の英語力に対する自信が高い。」という結果を報告している。

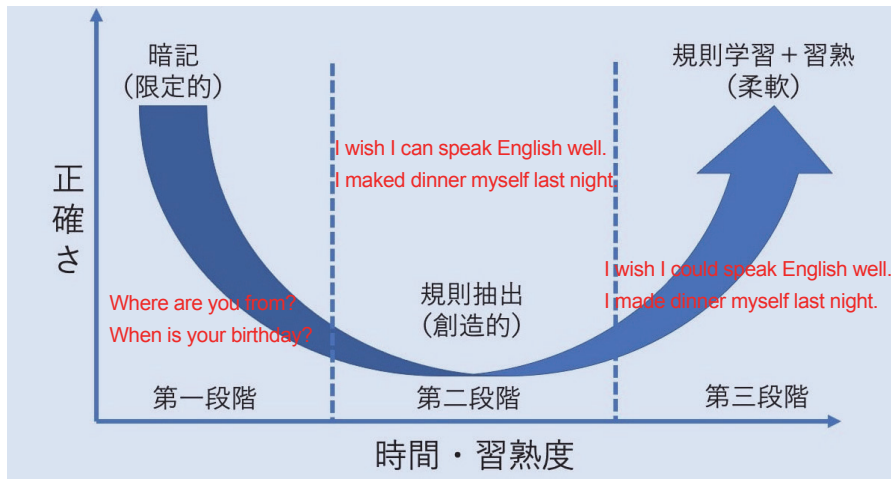
Ogawa and Izumi (2015) の調査参加者は日本の大学生である。「英語力の高い学習者は体験的学習をより多く行っている。体験的学習を行っている学習者の方が、自分の英語力に対して自信を持っている。」という結果を報告している。

高校生を調査参加者とした赤松 (2017, p. 275) は、「…、有効な学習方略や学業成績に対しては伝統志向が抑制的に、活用志向が促進的に機能することが明らかになった。」と結論している。いずれも英語力向上のためには体験的学習観を育むことが望ましいという点で一致している。



文法学習や語彙学習の重要性を否定することはできないが、英語は学んでから使うものではなく使いながら学ぶものという体験的学習観を育むことが望ましいと結論できる。

授業内で学習者に英語を使って活動をさせると、彼等のミスが気になってしまう教員も多いと思われる。しかし、ここで学習者の誤りをひとつひとつ修正するという行為は慎まなくてはならない。図3は学習者がどのような段階を経て英語を用いてコミュニケーションができるようになるかを示している。



<https://www.sunafuki.com/entry/English-SLA>

図3 英語習得の発達段階

第一段階は丸暗記した表現をそのまま使用している段階である。「相手の誕生日を知りたいときは“When is your birthday?”と言いましょ。」のような指示に従って活動している段階である。正確に使用できているように思えるが、覚えたことをそのまま使用している段階である。

私たちが理解しなくてはいけないのは、第二段階、つまり学習者が創造的に規則を抽出しようとしている段階である。この段階ではミスが避けられない。例えば“*I maked dinner myself last night.*”を例に挙げてみよう。これは「-edをつければ過去形になる」という規則をその規則を適用してはいけない語に適用してしまった例である。過剰般化 (overgeneralization) と呼ばれる現象である。誤りではあるが「-edをつければ過去形になる」という規則は理解できている。このようなエラーは第二言語を学ぶ際に頻繁に起こるものである。繰り返し練習しているうちに第三段階、つまり規則を柔軟に使える段階へと入っていく。

日本人英語学習者はほぼ例外なくspeakingに対する自信が非常に低い。筆者が行った調査では外部試験で高得点を取る学習者であっても英語使用に対する自信が低い。岩中 (2023) からの結果を紹介する。

- (1) 私は自分の英会話能力に満足している。 → 1.84
- (2) 私は自分の英語スピーキング能力に満足している。 → 1.84

これは5段階での回答結果である。平均が5点満点で1.84, 1.89であることから非常に低いことが分かる。TOEIC®で900点を超えるような学習者であってもこの項目で4や5を選ぶ学習者はほとんどいないというのが現状である。

この状況を改善するためには、不安認識に対する文化差を考慮することが求められる。Imada (1989) は、アメリカの大学生は到達することが求められているゴールに届かないかもしれないという状況が不安の原因になるのに対して、日本人大学生の不安はこれまでの平穏さや心地よさを失うのではないかとこの落ち着かない予想が原因となる傾向があると指摘している。

教員による説明が中心で受動的な態度で参加しておけばよかった授業に慣れてきた学習者が、自分の意見や考えを述べることを求められる授業に出るようになると、それまでの心地よさが失われるのではないかとこの気持ちに

なって不安に感じるのである。これは英語科だけで対応する問題ではなく、全教科で対応を検討すべきことであろう。

## 5. AIと英語教育

我々が使用しているSoftwareは3つに大別することができる。Software 1.0は、Pythonなどの言語を用いてコードを厳密に書くことができる人だけが使用することができる。使用者が定められた入力を行うことによって定められたフォーマットで出力を得ることができるのがSoftware 2.0である。翻訳ソフトであるDeepLや文法チェッカーであるGrammarlyは、Software 2.0に入る。現在、話題になっているChatGPTはSoftware 3.0に入る。Software 3.0を使用するために、専門的な知識は必要ない。自然言語がプログラミング言語になるため、プロンプトを工夫すれば誰でも使いこなすことができる。

AIを教育場面でどのように使用すべきかについては意見が分かれている。学習者の成長を阻害するような使い方は慎まなくてはならないが、筆者は教材作成のためにChatGPTを使用している。その具体例を紹介する。以下の英文は、Steve Jobsが2005年にStanford Universityで行ったスピーチの最初の部分である。

- (1) Thank You. I am honored to be with you today for your commencement from one of the finest universities in the world. Truth be told I never graduated from college and this is the closest I've ever gotten to a college graduation. Today I want to tell you three stories from my life. That's it. No big deal. Just three stories.  
(<https://note.com/sangmin/n/n42a3c9683b92>)

上記の英文をChatGPTに入力して、内容理解のための問いを2つ作成し、模範解答を示すように指示した。得られたのが(2)と(3)である。

- (2) What is Steve Jobs' emotional state or sentiment?  
He expresses gratitude and a sense of honor to be present at the commencement.
- (3) How does Steve Jobs feel about not graduating from college?  
It seems he doesn't view it as a major shortcoming or a source of regret. He believes that not following a conventional path can lead to success and fulfillment.

このまま授業で使用して問題のないレベルの問いになっていると思われる。筆者の個人的な見解になるが、(3)のような問いを作成することのできる教員は少ないのではないだろうか。

Steve Jobsのスピーチを聞いた後で学習者に書かせるエッセイの指示文を考えるように、ChatGPTに指示した。得られたのが(4)である。

- (4) Having listened to Steve Jobs' speech, reflect on its themes of life choices, passion, and learning from setbacks. Choose one theme that resonates with you and write an essay connecting it to your experiences and beliefs. Incorporate specific quotes from the speech to support your reflections. Consider how this message will shape your future. Pay attention to essay structure, clear expression, and proofread before submission. Your essay should be approximately 400 words.

筆者は担当する授業で、TED や YouTube を教材として使用している。大学生の知的好奇心に訴える題材が多く、使用されている英語の質も高い。「理解可能性」、「関連性」、「真正性」、「音声と文字のインプット」という望ましいインプットが満たすべき4つの条件(村野井, 2006)を満たしており、大学生が英語を学ぶ際に望ましい教材である。しかし、内容理解の問題作成やアウトプット活動の内容の検討に時間がかかるのが欠点である。AIを活用することによってこの問題を解決することができる。

英語教育に関わる者は、これからAIとどのように付き合っていくべきであろうか。AIの浸透を否定する、あるいは阻止するのは現実的ではない。使う人と使わない人の差が広がっていくだけである。しかしAIを前にして教育理念を忘れてしまうのも愚かなことである。

AIを教育現場でどのように使っていくのかは、我々教員にとって大きな検討課題になると思われる。教育基本法第九条によると、法律に定める学校の教員は、絶えず研究と修養に励むことが求められている。英語教育におけるAIの利用も我々の研究の対象になっていると解釈すべきであろう。

## 6. 育むべき英語力

グローバル化が進む今、我々はどのような英語力を育むべきであろうか。英検や TOEIC®のような外部試験を用いて成果を示すことは大切であるが、そこだけに焦点を当てるべきではない。筆者は英語指導を行う際に3つの側面を考慮するように心掛けている。その3つを表1に示す。

表1 言語能力を構成する3つの側面 (Cummins, 2009)

名 称	備 考
Conversational Fluency (会話の流暢度)	1. よく慣れている場面で相手と対面して会話する力 2. 母語話者の場合、2~8歳の間に習得 3. 頻度数の高い語彙と簡単な文構造で構成 4. 使用機会が十分あれば1~2年で獲得
Discrete Language Skills (弁別的言語能力)	1. ルール化ができて個別に測定可能な言語技能 (文字の習得・基本文型の習得) 2. スキルによっては母語話者と同程度のスピードで習得可能 3. 試験によって測定可能な能力
Academic Language Proficiency (教科学習言語能力)	1. 学校という文脈で効果的に機能するために必要な一般的な教科知識とメタ認知ストラテジーを伴った言語知識 2. 学校で提供される授業を受ける時に必要となる言語能力

これらの3つはいずれも大切であり、バランス良く育んでいくことが大切である。筆者は現在、自分が指導している学生が Academic Language Proficiency を習得するような教育的介入を試みている。

Academic Language Proficiency は知的水準の高いインプットに触れ、その後で Cognition を犠牲にしない高いレベルの思考を伴うアウトプット、つまり認知負荷 (cognitive demand) の高いアウトプットを行うことによって徐々に育まれていく。

実際に授業で使用したものを2つ紹介するが、その前に授業の流れについて説明する。本稿で紹介するのは、筆者自身が担当している4技能統合型の授業で高いレベルの思考を伴うアウトプット活動をどのように取り入れているのかについてである。

授業はPresentation, Comprehension, Practice, Productionのプロセスで構成している。自分の考えを口頭または文字モードで産出する認知負荷の高いアウトプット活動は、最後のProductionの段階で取り入れている。授業の流れを表2に示す。

表2 PCPPでの授業プロセス (村野井, 2006)

段 階	具体的な内容
Presentation	Warm-up Questions・Oral Introduction
Comprehension	内容理解 (TED・YouTube等)・Vocabulary Check
Practice	Oral Reading・Grammar Questions
Production	トピックに関する産出活動 (自分の考えを述べる活動)

本稿で紹介する(1)と(2)は、環境問題についての動画を教材として使用した時に産出活動として使用したものである。気候変動とプラスチック汚染について自分の考えを述べることを求めている。授業内では口頭で自分の考えを発表させて、授業終了後に文字モードで提出させるという形を取っている。

- (1) Climate Change: What are the leading causes of climate change, and how can individuals and communities contribute to reducing greenhouse gas emissions?
- (2) Plastic Pollution: Describe the impact of plastic pollution on marine life and ecosystems and suggest practical ways to reduce single-use plastic waste in our daily lives.

このような問いを作成するのは労力を要するが、生成型AIを用いれば短時間で質の高い問いを作ることができる。受講生には授業終了後に50~100語程度で提出するように指示している。

- (3) Climate change happens because we use too much stuff that makes the air dirty. These things, like gas for cars and factories, put “greenhouse gases” into the air. This is bad because it makes our Earth get hotter. To help, we can use less energy by turning off lights and not driving too much. We can also use clean energy from the sun and wind. In our town, we can use buses or bikes instead of cars. Our leaders must make laws that stop dirty stuff and help clean energy. (90 words)
- (4) Plastic is a big problem for the oceans. Fish and other animals eat plastic, and it can hurt them. We can help by not using things like plastic bags and straws. Instead, we can use bags many times and not throw them away. When we see trash on the beach, we can pick it up. It'd be good if our town also made rules to use less plastic. (67 words)

認知負荷の高い産出活動に従事することによって、最終的にAcademic Language Proficiencyの成長がもたらされると考えられる。これを証明した研究は筆者が知る限り存在しないが、Yamauchi and Nishikawa (2023)の研究結果を報告する。この研究では、picture description, responding to questions, そしてstating an opinion という3つのquestion-typesと英語力がどのように関連しているのかを明らかにすることを試みている。この研究で用いられている stating an opinion は、認知負荷の高いアウトプット活動に相当する。収集したデータを分析した結果、stating an opinion と英語力の相関関係が最も高かったと報告している。Academic Language Proficiencyを育むという試みは現在も継続中である。これは、日本の英語教育が今後、取り組んでいくべき課題であると筆者は考えている。

## 7. 結語

教職を目指す若者が減少しているのは周知の通りである。日本はアジアの中で教師のストレスが非常に高い国として報告されている (Jeon, 2023)。教職に就くということが大変な仕事であることは間違いのないであろう。しかし、教育が大切であることはいつの時代も変わらない。

本稿を終わるにあたり、Teachers as Nation-builders と Shaping the Future of Our Nation という言葉を紹介しておきたい。2019年にシンガポールの RELC International Hotel で開催された 56th RELC International Conference に参加していた際に、現地で教員養成に携わっている大学教員から聞いた言葉である。この2つの言葉は、筆者が教師の仕事と役割について再考するきっかけとなった。この国の未来を形作っているのは教師である。この事実は変わらない。教職の魅力を伝えるのは誰の仕事であろうか。これは教職についている現場の教師と教員養成に携わる者の仕事であると筆者は考えている。自分の仕事の魅力を他者に伝えることができることは、職業人としての誇りである。

本稿は、英語教育に携わる者が知っておくべき基本的な事項について説明を加えた。最後に体験的学習観を育む



ことの重要性について再度、述べておきたい。日本においては英語力を客観的な指標で示すことが求められている。多くの大学は学生の英語力を示すための指標としてTOEIC®を採用している。

読者の皆さんはTOEIC®700点と聞いてどのような印象を持つであろうか。これは日本国内の多くの大学生にとってクリアするのがかなり困難な得点である。クリアするためにはかなりの時間と努力が求められる。しかし、分析的学習観が高い学習者であっても十分に時間をかけるとクリアできてしまうレベルである。筆者の経験に基づいての判断になるがTOEIC®スコアが800点以上で体験的学習観が低いという学習者には会ったことがない。しかしTOEIC®700点は、分析的学習を中心とした学びで達成できてしまうのである。大学生としてはそれなりの高度な英語力を持っているが実際の運用力は低いという学習者を輩出してしまうことになる。このような事態を避けるためには、大学で英語教育に携わる者は授業内での活動によって学習者の体験的学習観を高めることが求められている。

### 引用文献

- 赤松大輔 (2017) 「高校生の英語の学習観と学習方略, 学業成績との関連－学習観内, 学習方略内の規定関係に着目して－」『教育心理学研究』65, 265-280.
- 岩中貴裕 (2023) 「教育的介入が学習者の言語学習観に与える影響－体験的学習観を分析的学習観」『中国地区英語教育学会研究紀要』第53号, 51-63.
- 太田信夫 (2021) 「認知心理学における顕在記憶・潜在記憶の研究」鈴木渉, 佐久間康之, 寺澤孝文 (編著) (2021) 『外国語学習での明示的・暗示的知識の役割とは何か』3-16. 大修館書店
- 白井恭弘 (2023) 『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店
- 廣森友人 (2023) 『英語学習のメカニズム－第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法－』大修館書店
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- Cumins, J. (2009). Fundamental psychological and sociological principles underlying educational success for linguistic minority students. In T. Skutnabb-Kangas, R. Phillipson, A. K. Mohanty, & M. Panda (Eds.). *Social justice through multilingual education*. (pp. 19-35). Multilingual Matters.
- Gass, S. (1997). *Input, interaction, and the second language learner*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Imada, H. (1989). Cross-language comparisons of emotional terms with special reference to the concept of anxiety. *Japanese Psychological Research*, 31 (1), 10-19.
- Jeon, J. (2023). *Building Up Resilience: Preparing Teachers for Challenges*. Paper presented at Asia TEFL 2023 Conference, Daejeon Convention Center.
- Miyasako, N., & Takeno, J. (2023). *Reframing collaboration in language education and beyond*. Paper presented at the JACET 62nd International Convention, Meiji University.
- Ogawa, E., & Izumi, S. (2015). Beliefs, strategy use, and confidence in L2 abilities of EFL learners at different levels of L2 proficiency. *JACET Journal*, 59, 1-18.
- Skehan, P. (2002). Theorising and updating aptitude. In P. Robinson (Ed.), *Individual differences and instructed language learning* (pp. 69-93). John Benjamins Publishing Company.
- Yamauchi, Y., & Nishikawa, M. (2023). *Which type of speaking test predicts L2 overall proficiency most?* Paper presented at the 21st Asia TEFL International Conference, Daejeon Convention Center.
- Yang, N. D. (1999). The relationship between EFL learners' beliefs and learning strategy use. *System*, 27, 515-535.